

小泉八雲のことも（続き）

根本重熙

文芸批評家としてのラフカディオ・ハーン

矢野禾積（峰人）氏は、「文芸批評家としてのハーン」という論文（東京都立大学学界人文学報）の中で次の様に述べられた。

ラフカディオ・ハーン（1856—1904）と言え、海外に対する、日本の紹介者・讃美者としてのみ片づけられ、文芸批評家としての卓越性に至っては、一般には殆んど認められていないかの観がある。それも無理からぬ事で、彼が如何にすぐれた批評家であるかが注目されるようになったのは東京大学における彼の講義集が公にされてからであると言っても差支えない。即ち、「文学の解釈」“Interpretation of Literature,1915”の二巻、「詩の鑑賞」“Appreciations of Poetry,1916”そして「人生と文学」“Life and Literature,1917”が、アメリカで出版された。各巻に付された序文において、ジョン・アースキン（John Erskine）〔筆者注：Columbia大学の英文学教授。上記講義集の校訂・編集者。前出〕が、批評家としてのハーンが、コールリッジ（Coleridge）にも比すべき、否、或る点に於いては彼にも勝る事を、繰り返し力説するに及んで、読書界・学界は、にわかに彼（ハーン）を見直すに至ったのである。英文の名手としては、其の名四海に遍きにも拘らず、今までは英米文壇においてさえ問題にされなかつた批評家としてのハーンに対する関心が、上記四冊の大著によって急に目ざまされた事は、1923年に、アルバート・モーデル編集の“Essays in European and Oriental Literature”や、矢張り同じ人の手で編まれた二巻の“Occidental Gleanings,1925”等ハーンの日本来住前に、ジャーナリストとして、アメリカの新聞のために執筆した短い批評集が相次いで刊行された事によって知られる。しかも此の間、前記四冊の講義集からの抜粋は“Talks to Writers,1920”，“Pre-Raphaelite and Other Poets,1922”と題せられ、また、これからの抜粋に、新たに三編を加えたものは“Books and Habits,1921”と名づけられて、いずれもアメリカで出版された。そして最後に1927年に至って、東大における英文学史の講義に、アメリカ文学史を添えたものが、東京北星堂から“A History of English Literature”と題して上梓されるに及び、批評家としてのハーン的全貌が、世人の前に始めて示されたのである。その後と雖も、“Some Strange English Literary Figures,1927”，“Lectures on Shakespeare,1928”，“Essays on American Literature,1929”，“Victorean Philosophy,1930”，“Literary Essays,1939”，“Lectures on Tennyson,1941”等。東大における講義の拾遺集と共に、

アメリカ時代の評論拾遺集が、いずれもハーンの熱心な愛好家によって編まれ、北星堂から出版された。これらの日本刊行物は、その量・質において、もとより、アースキン編集の大冊に比すべくもないが、しかも批評家としてのハーンの立場を理解し、彼の成長の跡を辿る上には必読の書であると言って差支えない。

アースキン教授が、彼（ハーン）を、コールリッジに比し、更に或る点においては彼（コールリッジ）に勝ると言った時に、北米読書界に一大センセーションを起こしたのは、コールリッジが批評界の大名であり、不動の高位を占めている人だからである。しかしハーンが平易なる言葉で、日本人学生を相手に語ったものであっても、真理は真理であり、その不変性・永遠性を生けるものとして、一層よく読者の胸に感銘を与えるように伝達する事に成功しているならば、更に文学作品の特殊なる味を損う事なく伝達する事に成功しているならば、原理の哲学的探究の為に却って対象の週辺を迂回したコールリッジよりも、少なくとも如上の点において勝っていると言っても誤りではあるまい。私は、アースキンの見方に、なんらの躊躇なく賛意を表すものである。そして私は、この様にすぐれた文芸批評家が、かつてわが国の最高学府の講壇に立って、英文学を講じた事を誇りと悦^{よろこび}をもって回顧すると共に、今後のわが文学研究者（外国文学たると日本文学たるとを問わず）が改めて、ハーンに立ち帰る事によって、世界人的立場から、世界文学の一環として、対象を見る事を学ぶのみならず、文学の味わい方と批評の仕方を学ぶべきであることを叫びたい。

筆者注：前出 John Erskine 教授は、彼の編集の四大冊の序文（Introduction）の中で次のように述べている。

“In substance if not in form they (Hearn’s lectures) are criticism of the finest kind, unmatched in English unless we return to the best of Coleridge, and in some ways unequalled by anything in Coleridge”

形式はともかく、実質において、それら（ハーンの批評）は最も精妙な批評で英文学中これに比すべきものは、過去においてコールリッジの最善の批評あるのみ。しかも或る点においてはコールリッジの如何なるものも、これに及ばない（矢野氏）

昭和25年3月から翌26年6月まで、駐日英国使節団文化顧問として滞在したG・S・フレーザー氏は、25年6月27日松江で開催の「小泉八雲生誕百年祭」に出席し、島根大学において「ラフカジオ・ハーン——一つの見方」と題して講演を試みた。その中で彼は述べている。

もし自分にして、ハーン先生らの後塵を拝して、今日の日本人青年学徒に対し、英文学の豊かな実りの幾分を、またその英知の幾分を、伝えるべきだとするならば、私は講義者としてのハーンの資格即ち透徹・共感・素朴さ、この三つを心がけねばならぬ。と自分に言い聞かせたのであります。

それで、私が皆さんにお話しようと思った三つのうちの第一のものは、教師・学者・批評家と

してのハーンを語ることであります。聴き手が大体日本人の場合に用意される英文学の講義となると、英国人にとっては少々つまらない読み物となる事は、普通考えられる処ですが、ハーンの講義は私にはその様に見えません。それは所謂調子を低くして語るといふ事が、いささかも無いのです。学生の側へ歩みよるのではなくて、寧^{ひしろ}真摯に、自ら胸裡を披瀝するという姿であります。また一連の講義の中で、広い範囲を取扱おうとする際には、安全な、因襲的な判断を踏襲したいという誘惑にかられるものです。しかし、ハーンの判断は常に真実で、独自のものであります。多少の限界はあるが、それは一つには、彼の時代の限界であり、一つには、彼の気質の範囲であります。ハーンは清教徒、耽美主義者、合理哲学者という相剋する三つの気質を、異様な、殆んど比類のない様式において、結合して持って居た。（西崎一郎氏訳）（「日本の印象」所収。朝日新聞社刊）

前出矢野氏は、「私は東大英文学科から、ハーンが遂われ、漱石が退き、敏が去るまでの即ち明治四十年頃を分岐点として、日本英文学界を前後二期に分かつこととする。つまり、ほぼこのあたりから所謂アカデミックな学風が漸次日本英文学界の主流を成す様に進んで行くのである。私は戦後機会あるごとに、若き学徒に向かって“ハーンに還れ”と説いた」と。

ハーンの後を襲ったのが「新帰朝者」夏目金之助であり、上田敏であったことはよく知られている。

漱石はイギリス留学中、英文学研究の方法論をいかに樹立するかを考え続けた。そしてその成果を帰朝後、東大の講義で披露することになった。ハーンの文学論と漱石のそれとを大雑把に比べてみると、ハーンが作品によって文学を語らしめるのに対して、漱石には方法論、原理の追求が先にあり、その例証として作品がある。つまり、ハーンの影響批評に対して、漱石はより実証的、科学的な態度であると言える。（以下略。松島正一氏）

（前 略）漱石は明治四十年大学を去り、敏も京都に移る。この後、東大英文科では日本人教師の空白が続くが、大正五年に市川三喜（明治四十二年卒）、大正十二年に斉藤勇（明治四十四年卒）が助教授として着任し、東大英文科の陣容が整備される。ここにおいて確立した日本の英文学は、ハーンのおこなったような作家をめざす学生にむけた文学ではなく、研究を主体とした英文学であった。付言しておけば、ハーンの良き伝統は上田敏、厨川白村（明治三十七年卒）等ハーンの教えを受けた人々が育てた京都学派に継承されていくことになる。（松島正一氏）

衣裳、デザインの世界に流行がある様に、学問の世界にもそれがあるものらしい。具体的には、英文学（日本に於けるそれに限らず）の学統、学派、学風、文学批評の生態等々の上にも栄枯盛衰は免がれないのであろう。「何時如何なる場合であっても前出ハーン先生の東大に於ける講義集は、それらの現象とは無関係に、不動不変の価値を失わないものだから、それを読んで、そこか

らの再出発を勧めておられるのだ」と、前記「ハーンに還れ」と機会あるごとに説かれたという碩学の文を筆者は読んだ。勿論ハーンの講義集については、多くの批判反論がある。殊に最近脚光を浴びている（と筆者には思われる）所謂アカデミックな又は科学的な立場からの知的・理論的完全装備を以って作品群に向かう立場から見て、前述アースキン氏等の「ハーン論」が、どの程度の説得力を持つのか、容認され得るのかは、各人の判断に委ねられていて、冷暖自知である。その場合にも彼の説——講義集は依然として重要な試金石？としての存在価値を失わないであらう。そもそも、勝れた書物とは、初めから終わりまで全体が正しい本の謂ではなくて、多少（又は多くの）瑕疵があっても、正しい処はひどく正しい本のことであろうから。小泉先生は東京大学での「トルストイの芸術論」（既出）なる長い講義の最初の部分で言う。

講義を進めるに先立って、諸君に注意して置かねばならないが、どんな批評が加えられてもその為はその論説に対して偏見を抱いてはならない。文学研究の学生が心得て置くべき事で何よりも肝腎な事は種々あるがその一つは、自分の考が、他人の説によって囚われてはならないという事である。私は諸君に講義はするが、諸君が、今言った法則に従って、斯く言う私の説にも気を許さないようにして貰いたい。単に、私がそう言ったからと言って、ある事を良いとか悪いとか考えないで、公平な気持で読んだり考えたりした上で、私が正しいか間違っているかという事を諸君自身の頭で見付け出そうとしなければならない。

トルストイの場合では、非難が余り甚だしかったし、ある点においては酷評が余り堂々としていたので、私までが本を買うのを一時ためらった程である。しかし、芸術上の問題を取り扱って世の中の半数の人の怒りを買う事の出来るような本ならば、きっと偉大な力を具えた本に違いないという事を、私はすぐ後で感づいた。実際ある男を、単にその意見がどうのというだけの理由で貶したら、却ってそれは、その男がどこかに値打ちがあるという立派な証拠なのである。そして今、その本を読んで見て、自分の考え直したことが全く正しかった事が分かった。実に偉大な著書であるが、それは驚くべき謬説がある事に気を付けねばならない。途法もない思い違いで、苛酷な批評を当然受けるべきものがあるのだ。多くの思想家は、偶一方に長所を持つと同様に、他方において欠点があるものである。（以下略）

ハーン先生のホイットマン論〔酷評の代表的なものだと言う又その作品の短命を誤って予言したものとして、マイナスの方へ有名であるとも。(I cannot believe it will endure as a great work endures.)〕を捕まえて、彼は、明治時代の新進学徒に大きな偏見を与えたから、その責任をわれわれは問わなければならないという意味の論を読んで、歴然とした経験がある。いつ、どこで、どの本で、読んだのか、相当に古い事だし今探し出すことも出来ない。又どうでもよい事だが、その時は、一時それに引かかった。責任を問おうにもその方法がない。第一に責任など抑々しい問題ではない。ハーン先生の注意にある通り学生達は、それを鵜呑にするべきでなし又する筈もない。明治時代（どの時代でもと思うが）の新進学徒の知的水準を過小評価しない方がよい。

先生が酷評すればする程学生は、それに対して注目して必要な復原力を発揮するであろう。彼の聴講生の或る者は「社会的、宗教的偏見の為、英米の大学に於ては、往々説き難いことも極東の大学講座にあっては、スウィンバーンを説いても、又ホイットマンを揚げてあも斥けても平気である」と言っている。偏見を植えつけられる心配は無用である。ハーン先生としても、その時に、彼が理解する彼の文学論を、彼なりの表現で説明する以外に如何なる方法もなかった。どうでもよい事だと言って置きながら長くなった。閑話休題。

上記論議集の出版に多大の貢献を果たしたミッチェル・マクドナルド (Mitchell MacDonald) は、1899年(明治32年)2月に、ハーンから、あの講義はただの口述で——頭から口へのもの——あるから出版の価値が無い旨の手紙を受け取っていながら、親友の意(又は遺)志に反してまで(ハーンの生前であれば、何回もの書き直しをしてからでなければ、出版に同意することはなかったであろう)も多大の困難を顧みること無く(既述)出版まで漕ぎ付けるように、この米海軍の主計少将を駆り立てたものは(ハーンの為に、この人が果たした献身的行為群を含めてであるが)恐らくケルトの、男の友情というものであろう。矢野氏の言の通り、日本の紹介者としての以外に高度に良質の文芸批評家ハーンを世間に深刻に印象づけて、親友をしてその没後にも長久の生命を与えることになった画竜点睛の作業を完遂したのは、ミッチェル・マクドナルドなる一個の気宇壮大、文武両道に通じた快男子である。ハーン先生も天の一角で「持つべきものは、親友かな」と呟つぶやいているかも知れない。(未完)

参 考 文 献

小泉八雲全集：(第一書房)
小泉八雲入門：平井呈一著
ラフカディオ・ハーン
小泉八雲：田部隆次著
ラフカディオ・
ハーン著作集：(恒文社)

松江の小泉八雲：池野誠著
小泉八雲論：広瀬朝光著
近代文学研究叢書：(昭和女子大学近代文学研究室)